

とき 平成二十年八月二十三日(土)
午後五時三十分始
ところ 新城文化会館大ホール
入場無料

第十九回 新城薪能

能 組

老松	伊藤早希
猩猩	加藤史織
七騎落	川村美幸
猩猩	伊藤有希
仕舞	
女郎花	今泉尚美
女郎花	定盛展也
仕舞	
女郎花	

狂言 舎 弟

弟 天野遼星 兄 熊谷隆
 後見 酒井 宏 教手 加藤慧士

仕舞	加藤 晃
女郎花	村田昂平
仕舞	島 考三郎
桜川	島 尚大郎

火 入 式

新城市議会議長 丸山繁治
 新城市教育長 和田守功

連 吟 花 筐

シテ 永田聡子
 ワキ 鈴木富代

太田温子
 伊藤秀子
 小林寿枝
 竹下京子
 今岡アイ子
 夏目みよ子

ごあいさつ 新城市長 穂積亮次

6時10分頃

5時30分頃

6時40分頃

連調田村

佐藤 陽
栗谷 明生

伊藤 秀子
小林 寿枝
今岡 アイ子
永田 聡子
星野 弘子

狂言 瓜盗人

盗人 天野 雅夫
百姓 山本 勝

笛 酒井 淑規
後見 大原 正巳

仕舞

田村 慶クセ 太田 温子
船弁 慶クセ 夏目 みよ子
葛城 城クセ 伊藤 秀子
小塩 塩クセ 鈴木 富代
杜若 若キリ 小林 寿枝
花筐 筐クルイ 竹下 京子

7時30分頃

狂言 六地藏

スツバ 佐野 泰三
田舎者 水谷 至男

立衆 清川 松佐
立衆 山口 俊一
立衆 小林 常男
後見 大原 正巳

8時頃

能 黒塚

シテ 中嶋 康夫
ワキ 牧野 修
間加 藤賢一 桜本 泰朗

大鼓 清水 利高 太鼓 鈴木 崇史
小鼓 森田 收 笛 今泉 英三

後見 栗谷 明生 佐藤 陽
太田 康弘 中村 邦生
地謡 杉浦 史佳 栗谷 能夫
竹内 省吾 栗谷 浩之
長田 共永

附祝言

(終了予定九時頃)

主催 新 城市
後援 新 城市教育委員会
新 城市観光協会
新 城市文化協会

あ ら す じ

狂言 舎弟

親から貰った名前があるのに、兄からいつも舎弟と呼ばれていた弟、ふと舎弟と言ふことばの意味に不審を抱き早速ものしりの某に尋ねます。某はいたづら心で舎弟とは盗人の事だと教えます。そこで腹を立てた弟が兄の処へまゐりまして……

狂言 瓜盗人

畑の瓜が盗まれるので、畑主が案山子を作っておくと、やってきた盗人は人と思つて驚くが、案山子と知ると怒つて壊し、畑を荒らして去る。翌日、今度は畑主が案山子に化けて待っていると、盗人はまんまとひっかけ……

狂言 六地藏

今生後生のため六地藏堂を作りました。そこで安置する地藏を仏師に頼もうと田舎者は、都へ上ります。都に着いたが、仏師の居場所を知らない。そこで大声をあげて仏師を尋ねます。これを聞いた都のスッパ(詐欺師)が親切に声をかけ、事情を聞き、自分こそが真仏師であると名乗り、明日の今時分迄に六地藏を作つてやろうと約束します。仲間三人とカタライ、三人づつ二度に分けて地藏に化けて田舎者をだますことにする。そこで……

能

黒塚

日も暮れた奥州安達原。やってきたのは阿闍梨祐慶の一行。諸国を行脚中の熊野の山伏たちです。野中かなたに見える小さな明かりを頼りに行きますと、それは一軒家。一夜の宿を乞いますと、現れた女は断ります。しかし、祐慶のたつての願ひに、女はどうとう一行を招き入れるのでした。家の中で祐慶は、そこにおいてある袴袴輪(糸車)を目にとめます。見慣れぬ物なので女に問いますと、それを使つて糸を繰つて見せます。繰りつつ女は、世の因果応報を語り、また、老いの早さを嘆きます。そして糸尽くしの歌を謡つて、人の身のはかなさ、長い命のつれなさをかこち、ふと糸繰りをやめて、泣き崩れるのでした。夜が更けます。冷えてもきました。女は、もてなしの火を焚くために山で薪を採つてくるといい、表に出て行くのですが、つと立ち止まり、決して閨の中をのぞかぬようにと言ひおくのでした。(中入)

女の言葉を不審がり閨をのぞこうとする能力(アイ)。しかし祐慶は許しません。やがて一行は寝入ります。すると一人起き出す能力。そつと閨をのぞきます。そして見たものは累々たる人の骸。腐臭ただよい、その物凄さに驚き倒れる能力。能力は驚きあわてて祐慶たちに知らせます。事を確かめ、一目散に逃げ出す一行。閨をのぞかれたと知つた女は、約束を違えたことを難じ、恨み、鬼女と変じるのでした。火炎を背に放ち、雷鳴を轟かせ、鉄杖を振りかざして祐慶たちを追います。これを迎えて五大明王に必死に祈る祐慶。襲わんとする鬼女。双方の激しい攻防が、いつ果てるともなく続きます。しかし、ついに勝つのは祐慶。祈り伏せられた鬼女は凄まじい恨みの叫びを残し、夜嵐とともに消え去るのでした。

この名称は、夜になって薪を焚いてそれを照明代わりに演能するところから来た名称ではありません。もとは「薪の神事」などと称して新年に薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎えの信仰行事でした。それに伴って行われる猿楽が「薪の猿楽」でありました。

奈良の「薪能」は奈良時代に起こった行事で、興福寺の衆二会しゅにえに鎮守やしろの社から東西金堂へ行法のために薪を積む儀式であり、その時翁式の聖者が薪を負うて舞うことが芸能化しました。初めは寺に所属する呪師しゅしが司つかさどっていました。後に、猿楽者が代行するようになりました。能楽が大成後は金春座が責任者となり、他の座も参勤していましたが、明治以降は中絶、戦後復活、昭和二十五年京都薪能が平安神宮で催されて以来、各地で大衆野外能として流行するようになりました。

新城においては、新城文化会館が完成したのを契機に、平成二年第一回「新城薪能」が新城市文化協会主催で催され大好評を得ました。富永神社の祭礼能とは別に、流派を問わず誰でも参加できることとし、まさに「能楽の里」を目指しての企画であります。現在全国で二〇〇か所ほど薪能が催されていますが、ほとんどが能楽師による演能で、新城薪能のようにシテ方・ワキ方・囃子方・狂言方すべてが素人というのはほとんど例を見ないと言われております。このような新城薪能を、長い伝統を持つ祭礼能と共に維持発展させてゆくことが私共の念願であります。今後とも絶大なご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

謡・仕舞・囃子(笛、小鼓、大鼓、太鼓)・狂言のお稽古をなさりたい方は、お気軽に文化協会事務局へお申し込み下さい。それぞれの向きにお世話致します。